

1 植物調査

(1) 調査時期について

複数の季節に調査を実施し、調査範囲の植物相をできる限り正確に把握するよう設定する。特に、春季は早春にのみ確認できるエフェメラルプラントに留意するほか、秋季は果実の形状が同定ポイントとなるイネ科植物等の確認に適した時期を設定する。

表 調査時期一覧

調査項目	調査方法	早春季	春季	初夏	夏季	秋季	冬季
植物相	踏査により、種子植物及びシダ植物を基本とした出現種を記録	○	○		○	○	
植生	植物社会学的手法により、現存植生図を作成する				○	○	
土壌	植生調査に基づき、(土壌の)分類、構造及び生産力等を推定し、現地調査により確認					○	
注目すべき個体、集団、種及び群落	生育地の環境条件(日照、土壌、斜面方位、周辺植生等)を確認	○	○		○	○	
保全機能等	既往文献等を参考に、地形・地質、水象、動物又は植生等の調査に基づき、植生の有する保全機能等を推測					○	

(2) 調査地点の設定方針

植物調査は、地形の傾斜や方位、土壌水分等の環境条件に応じてルートを設定し、ルート上に出現する植物相を把握する。

表 調査地点又はルートの設定方針

調査項目	設定方針
植物相	地形、水象等の環境条件ごとにルートを設定 特に、岩角地、崖地、崩壊地、湿地、水辺等の特異な立地を含める
植生	調査地点の設定は行わず、調査範囲の全域を区分 1区分につき1~5調査区を設定し、群落組成調査を行う
土壌	植生、地形・地質に応じてルート及び地点を設定
注目すべき個体、 集団、種及び群落	分布の可能性の高い場所を想定し、詳細な調査を行う。生育環境については、対象の特性に応じ、生育地及びその周辺について調査を行う。
保全機能等	調査地点の設定は行わず、調査範囲の全域に関して推定

2 動物調査

(1) 調査時期について

調査は、対象分類群ごとに複数の方法を用いて、できる限り正確に生物相を把握できるよう設定している。

各調査方法の特性や対象動物が確認しやすい時期の観点から、調査時期について調査方法ごとに設定した。

表 調査時期一覧

対象分類群	調査方法	早春季	春季	初夏	夏季	秋季	冬季
哺乳類	任意観察		○		○	○	○
	フィールドサイン法		○		○	○	○
	トラップ法 (ネズミ類)		○		○	○	○ ^{注1}
	バットディテクター 及び捕獲調査 (コウモリ類)				○		
	センサーカメラ法	適宜実施する					
鳥類	ラインセンサ法		○	○	○	○	○
	任意観察		○	○	○	○	○
希少猛禽類	定点観察法	月1回(12回/年)を基本とする					
両生類・ 爬虫類	直接観察	○	○		○	○	
	任意採取						
昆虫類	直接観察		○	○	○	○	
	任意採取		○	○	○	○	
	ライトトラップ		○	○	○	○	
	ベイトトラップ		○	○	○	○	
魚類	任意採取		○		○	○	
	繁殖情報調査	生息魚類の繁殖期に実施					
底生動物	任意採取	○	○		○	○	
	定量採取						
陸・淡水産 貝類	直接観察	○	○		○	○	
	任意採取						

注1 積雪の状況により実施を判断する。

(2) 調査地点の設定方針

各分類群の種組成を把握するため、それぞれの生息環境を網羅するよう調査地点、区間、ルートを設定した。

表 調査地点又はルートの設定方針

対象分類群	調査方法	設定方針
哺乳類	任意観察	環境条件（植生区分、地形、水系等）ごとにルートを設定
	フィールドサイン法	
	トラップ法 （ネズミ類）	林内、草地、湿性地等の複数環境に地点を設定
	バットディテクター 及び捕獲調査（コウモリ類）	洞窟の入り口や森林の開けたところに地点を設定
	センサーカメラ法	哺乳類の移動ルートに地点を設定
鳥類	ラインセンサス法	環境条件（植生区分、地形、水系等）ごとにルートを設定
	任意観察	
希少猛禽類	定点観察法	範囲内の上空を眺望するポイントに地点を設定
両生類・ 爬虫類	直接観察	環境条件（植生区分、地形、水系等）ごとにルートを設定
	任意採取	
昆虫類	直接観察	環境条件（植生区分、地形、水系等）ごとにルートを設定
	任意採取	
	ライトトラップ	林内、草地、湿性地等の複数環境に地点を設定
	ベイトトラップ	
魚類	任意採取	異なる水域（水系、止水流水等）ごとに区間を設定
	繁殖情報調査	魚類の生息可能な水域の全域を対象とする
底生動物	任意採取	異なる水域（水系、止水流水等）ごとに地点を設定
	定量採取	
陸・淡水産 貝類	直接観察	林内、草地、湿性地等の複数環境に地点を設定
	任意採取	